

佳作

父の偉大さ

静岡県 韮山高等学校一年 増田 航大

この夏、母が病気で入院した。

入院一日前、僕は父とこんな会話をした。

僕「二人で二週間もやっていけるかな。お父さん家の事

ちゃんとやってくれよ。」

父「任せろ。でもお前もちゃんと手伝ってくれよ。」

僕はこれを聞いたが安心はできなかった。なぜなら父は少しだらしがないし、家の事はほとんど母がやっていたからだ。そして、いつものように部活に行き、塾に行き、友達と家に帰ると、すでに母は入院していた。夜ご飯は、母の手作りではなく、スーパリーの弁当だった。食べているとなぜか切なくなってきた。そんな日々を過ごしたくなかった僕は、合宿までいとこの家に泊まることにした。正直いって父と二人でいるよりは、だんぜんいとこの家にいる方が快適だった。塾から帰れば手作りのご飯があるし、いとこと夜は遊べるし、楽しい毎日だった。でも心のどこかで、一人で家にいる父が心配でしかなかった。

そんなある日、母のお見舞いに父と二人で行った。行く道の車の中で僕は

「ちゃんと一人でできてるの？」

と聞いてみた。すると

「当たり前だよ。」

と父は笑顔でいつてきた。

「さみしい？」

と、ひやかしてみると

「一人が楽だ。」

と意地を張ってそう言った。

合宿前日、僕は支度があるのでこの日だけは家に帰った。すると、机の上には、父の仕事道具が置いてあった。家ではグラグラし、仕事している姿は見たこともなかっただけに驚きを隠せなかった。

「なんで仕事してんの？」

と言うと、父は

「男は陰で努力すんだよ。」

と、返してきた。その横顔は、とてもたくましく僕の目に映った。その日の夜は、明日の集合が早いため、十時に寝た。そして五時半になって、リビングへいくと、すでに父がソファに座ってテレビを見ていた。

「おはよう。」

と言われたので

「おはよう。」

と返すと、父が

「ご飯つくったから。」

と言ってきた。机の上を見ると、炊きたてのご飯とウインナー、目玉焼きが、つくられていた。父のつくった料理は、食べた事もなかったの味は大丈夫なのかと心配したが、とてもおいしかった。後々考えると、母が入院した日の夜がスーパリーの弁当で、僕が嫌そうな顔をしたから、きっと父なりに気をつかってくれたのだろう。本当にうれしかった。僕が合宿でいいプレーができたのも、父の朝飯があったからだと思う。一日目の夜、二日目の夜、父から電話があり、

「調子はどうだ？すっかりがんばっているのか？」

と聞いてきたのも、いつも母が僕にしてくれてくれたことだった。父は母の代わりにと、優しくしてくれていた。

合宿から帰宅すると、家には母がいた。机の上には、たくさんのお菓子が並んだご馳走があった。久しぶりの母の手料理はとんでもなくおいしく、

「うまい。」

と、おもわず言ってしまった。その夜、母が僕に、入院中の出来事を聞いてきたので、たくさん話していると、驚くべき事を母が言ってきた。それは、

「お父さんが毎日お見舞いに来てくれて本当に助かったよ。」

と。僕は忙しくて、一回しか行けなかったけど、父が毎

日忙しい中、行っているのを聞いて、めちやくちやいい人だと、尊敬した。

僕はこの夏に、改めて、父の偉大さを知った。隠れて努力する姿、優しさのある姿、すべてが、僕の人生の先輩だ。

僕はいつまでも父の背中を追い続ける。